

# 茶の湯文化学会会報 No.60

第60号 / 2009年3月31日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270  
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314  
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp



小井川氏の研究発表

滋賀県彦根で茶の湯と聞けば、まずは井伊直弼、そして埋木舎、茶湯一会集、一期一会などがすぐに思い浮かぶ。二月二十一、二十二日に開催された彦根での第二十七回研究会は、まさにそれらに浸りきることできた二日間であった。参加された方の数も、初日の研究発表と講演は百三名、その晩の琵琶湖畔での懇親会は七十三名、翌日の見学は六十八名と、大変盛況であった。

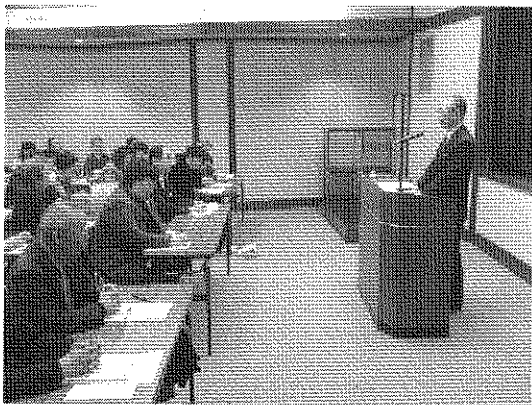
初日は彦根城博物館を会場にして、まず同館学芸員の小井川理氏が「直弼の茶会と茶道具」と題する研究

## 彦根での茶の湯研究会

池田俊彦

発表をされた。直弼による四つの茶会を取り上げて、それぞれの道具組みや趣向を詳しく説明され、『茶湯一会集』や『茶湯をりをり草』に記す直弼の茶会意図が表われた様子を、季節や時刻、光の加減などとの関係も示しながら具体的に論じられた。安政の大獄のイメージからすれば、豪腕さが想像される直弼であるが、茶会においていかに細やかな配慮を駆使していたか、あらためて知ることのできる内容であった。

これにつづいて、倉澤行洋前会長が「井伊宗観における茶道の哲学」というテーマで講演された。まず、「宗観」という号の由来とその意図（何ものにも執らわれず自由活発に働く）について、次に、中国での道教・儒教・仏教における「道」（「究極の処」の意）から見た「茶道」の語の意味について、そして最後に、宗観の茶道が、「茶道は心を修むるの術」（『入門記』）という認識から茶を行ない始め、それが実生活にも入っていき、ひいては生活全般が茶道化するのを理想としたものであったこと等を示された。そしてそうした茶道観は、他の茶人には見られぬほど強調されており、茶事のみならず生活全般に自由活発に心が働くという「宗観」の号にも通じるとされた。



倉澤前会長の講演

また直弼の説く「二期一会も、「お流れ」を感じて「空」を観じるといふことから、同じ茶道観に立つものであるとも付け加えられた。

講演終了後は、ほとんどの方が博物館内の展示も見学されたようであった。

二日目は、朝、前日の会場に集合し、そこから徒歩で各見学場所を回った。最初は、谷口徹氏（彦根市教育委員会文化財課々長）のご案内で、彦根城表門から表坂を登り、天秤櫓の石垣、着見台からの城下と佐和山城の景色、天守閣内部などを見学し、さらに麓に下つ

て、四代藩主井伊直興が延宝七年（一六七九）に造った玄宮園の庭園と数寄屋、楽々園の御殿などを見て回った。それぞれ見所を分かりやすく、かつ専門的な内容にも踏み込んで説明されたので、それらに対する興味が一段と深まったように感じた。



谷口氏と天秤櫓の前で

その次は彦根城博物館の能舞台へ移り、大久保治男氏（埋木舎当主・武蔵野学院大学副学長）から井伊直弼の茶と歌についてお話を伺った。直弼の茶に対する姿勢、詠んだ歌の実際、茶と歌の両面から見出される直弼の誠実な人柄などを、現在の政治家との比較を織

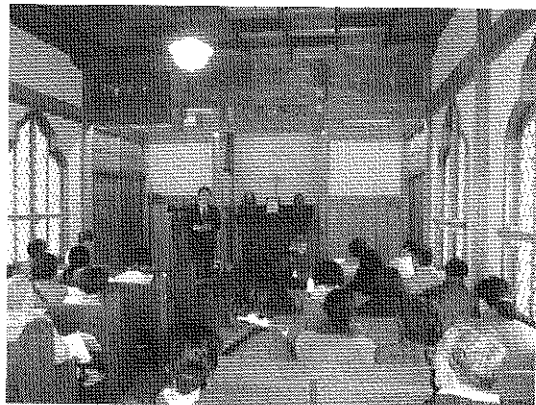
り交ぜながら話された。無論そのあと埋木舎現地にも移り、澗露軒などを前にしての茶室解説のほか、大久保家が埋木舎を守ってきた苦難の歴史、NHK大河ドラマ「花の生涯」撮影の逸話などについても、時にユーモアを交えながら話された。また、大久保氏のご厚意により、建物内の見学もさせていただいたのは幸運であった。



埋木舎での大久保氏

見学の最後に訪れたのは、彦根城の南、平成十八年に再建なったスミス記念堂である。ここでは、全員礼拝堂内に着席し、森将豪氏（NPO法人スミス会議理事長）から解説を

いただいた。お寺とも神社とも教会とも言い得る不思議な雰囲気の中で、森氏は、スミス牧師のこと、棟梁による礼拝堂建築の特徴、再建の逸話やご苦労、ここの楽しい活用法などを丁寧に解説いただいた。信長の時代、茶の湯にも興味を抱いた宣教師たちの教会も、ひよっとしたらこのような雰囲気が出ていたのでは、などと思いを馳せながら、興味深く話を聞かせていただいた。



スミス記念堂内で森氏と

このように、この二日間、充実した内容を学び、また彦根の茶と茶人の雰囲気にも浸り切れた、大変楽しく有意義な研究会であった。

お話し下さった方々に、あらためて感謝申し上げますと思う。

### 理事 会

平成二十年十二月二十日（土）午後二時より、池坊短期大学第二会議室で平成二十年度第二回理事会が開かれた。出席者は、会長・理事十一名で、議題は以下の六題であった。

- 一、次期会長候補者選考
- 二、第二十七回研究会について
- 三、平成二十一年度大会について
- 四、会員増強
- 五、大学図書館への会誌頒布について
- 六、その他

一では、九月二十一日に会長候補者選考委員を含め三人で委員会を開催した結果、谷会長にもう一期お願いしたいということになり、引き受けていただいたと報告があった。

二では、二月二十一日と二十二日に彦根で開催する研究会の説明があり、二十一日は彦根城博物館で研究発表と講演を行い、夜は懇親会をする。二十二日は彦根城、玄宮園、埋木舎、スミス記念堂の見学をする予定のとこと。

三では、六月十三日（土）に京大会館にて開催予定であることが報告された。発表者五名を募集中で、三月までに詳細を決めてポスター制作や茶道関係の雑誌に行事の掲載依頼を出すことになった。シンポジウムのテーマや、翌日の見学会についてはこれから検討することになった。

四では、①新しい例会を発足させる。②近畿例会の活発化を図る。③ホームページを早急に充実させる。④茶道関係雑誌への行事掲載依頼など、会員を増やすために話し合われた。

五では、大学の附属図書館から購入依頼があった場合の頒布価格についての提案。会誌の購入依頼状を送るために、会員の大学教員と公立の図書館をリストアップすることになった。

六については、二〇一〇年十月に開催される「世界お茶まつり」では具体的な内容が決まり次第できる範囲で協力することとなった。

### 例 会

東京例会

（平成二十年一月二十六日）

## 「名物裂」と明時代の出土織物

吉岡明美

「名物裂」と称される絹織物は、金襴、緞子、間道など主として室町時代に明から舶載された絹織物で、当時の我国では献上品として珍重されるほどの高級品であった。唐物茶入の仕覆や唐絵の表装としても大いに好まれ、桃山・江戸時代に伝世する過程において、添っていた茶入の銘、愛好した茶人の名、文様の特徴などから、次第にそれぞれの裂地に固有の名称がつけられていった。

近年、中国の明墓から「名物裂」に共通する数種の絹織物が出土し、時代を明らかにする手掛りとなっている。特に注目されるのは、万暦皇帝（一五六三〜一六二〇）墓「定陵」から出土した角龍金襴で、棺内で皇帝が帯として身につけていた。帯は皇帝専用とされる五爪の龍を金糸で角形の文様に織り出した赤地の金襴で、同種の金襴が、現存する玉潤筆「瀟湘八景図」の「遠浦帰帆図」（重文 徳川美術館蔵）「洞庭秋月図」（重文）「山市晴巒図」（重文 出光美術館蔵）の一文字・風帯に用いられている。中廻しの紺地花唐草文金襴、上下の萌黄地花唐草文金地金襴も三幅に共通する。さらに『宗湛日記』の記載か

ら、現存しない「煙寺晚鐘図」「平沙落雁図」「瀟湘夜雨図」も同じ表装であったことが推察される。

玉潤筆「瀟湘八景図」のうち六幅の表装が同一ということは、茶会記に表装の記載がなかった「江天暮雪図」「漁村夕照図」の二幅も例外ではなく、おそらく「瀟湘八景図」八幅とも揃いで誂えたことと思われる。「定陵」で万暦皇帝が着用していた帯と同種の赤地角龍金襴は、我国では丹（黄がかつた赤）地の角龍あるいは升龍と呼ばれている。その金襴を一文字・風帯に用いた「洞庭秋月図」を天王寺屋道叱が茶会に使用した永禄十年（一五六七）『天王寺屋会記』は、万暦皇帝四歳の年であった。このことは、十六世紀に中国で織られた皇帝専用の金襴が、ほぼ同時期に我国に渡っていたことを示している。

『室町殿行幸御飭記』の記載から、玉潤筆「瀟湘八景図」は、足利義教（一三九四〜一四四二）の時すでに八幅であったことが知られている。その八幅が十六世紀になって散逸する以前、將軍家のもとで一斉に渡来の赤地金襴を一文字・風帯に用いたか、あるいは表具全体を新渡りの金襴で仕立て直したことが推察される。中国の宮廷工房で織られた絹織

我国に渡来していたと考えられる。

今回数例ではあるが、年代の明らかな明時代の出土品と「名物裂」を照合することにより、伝来する掛軸の表装に用いられた金襴、緞子、および茶人の名称がつけられた裂地の渡来時期を推定することができた。

（平成二十年四月二十六日）

## 「琳派と茶道―近代以降の「光悦」像―

福島修

ルイ・ゴンス『日本の美術』（一八八三年）をはじめとして、明治期の外国人による日本美術書には本阿弥光悦の名がしばしば登場する。しかし光悦を万能の天才であるかのように称える高い評価は、アーネスト・フランシスコ・フェノロサが最初といつてよいだろう。

岡倉天心の光悦観はこれに近い。明治四十三年（一九一〇）四月から東京帝国大学で講義した「泰東巧藝史」において、岡倉は「光琳は光悦を凌駕するものにあらず」と論じ、光琳よりも高い位置にあることを殊更に強調した。この言葉は、当時の光琳に対する評価の高まりを考慮すると、やや意外な感を抱かせる。明治三十年代から、光琳はヨーロッパに大きな影響を与えた立派な画家として、国

物が、どのような経緯で日本にもたらされたのかについては今後の課題としたい。また、「定陵」の万暦皇帝皇后の棺内から出土した

花蜂文紬と同種の裂地が、桃山時代の黄瀬戸獅子香炉（重美 根津美術館蔵）の仕覆として伝来し、我国では紬地撫子文金襴と呼ばれている。『フロイス日本史』永禄八年（一五六五）によれば、当時茶道具は緞子や絹の袋に入れて独自の小箱に収めていたとあり、この裂地も万暦年間に渡来して、香炉の袋に仕立てられたことと思われる。

万暦三十二年（一六〇三）墓出土および北京・故宮伝来の花葉文絹織物は、正保三年（一六四六）『松屋会記』小堀遠州が茶会で掛けた古田織部宛利休の文・中廻しに用いられた緞子と文様が共通する。茶会記には「織部殿表具」と記されており、織部（一五四三〜一六一五）が、当時中国より舶載された緞子を表装に仕立てた様子が伺える。また同墓出土の螭虎文緞子は、雷文繫ぎに我国でいう雨龍を組み合わせた文様で、細川緞子と酷似しており、武家茶人・細川三斎（一五六三〜一六四五）頃の舶載裂と思われる。嘉靖十二年（一五三三）墓より出土した落花流水文緞子は、文様が織部緞子に共通し、十六世紀後半には

内でも名を馳せていたのである。岡倉はこの評価をふまえ、光悦をその更に上に位置づけたことになる。

岡倉をはじめ、国内の琳派評価にはフェノロサにはない独特の見解が見られる。すなわち、「いわゆる光琳派はすべて、茶道の表現である」（『茶の本』（一九〇六））。「茶道」を造形論に変換し、それを以て光悦を説明しようとする言説は、光悦評価の高まりに伴って数を増していく。これらのうち、茶道の表現なるものについて明確な概念定義があったかといえどもちろん疑わしく、鑑識基準も曖昧な伝光悦作品を印象で語ったに過ぎないものが殆どであった。それでも光悦の作品は次第に価値を高め、「茶道」のイメージとともに偉人光悦像が形成されていった。

大正から昭和にかけて茶人たちの間で生まれてきた光悦信仰のようなものは、こうした評価を土台とするものであろう。光悦顕彰を掲げて設立された光悦会編纂の和装本『光悦』（一九一六）は、総合的に光悦を学問的な視点で整理した最初の書であるが、光悦が「万能の天才」であり「茶人」であるとすするイメージを強調し過ぎる傾きは否定できない。こうした「顕彰」を目標とする光悦会の研究に対

し、厳密な資料批判に基づく真の光悦像を導こうとしたのが、戦後の光悦研究の大きな流れである。それは、光悦作と伝えられる膨大な作品群を光悦自身から引き剥がしていく試みでもあった。確かな光悦作品とは何か、という根本的な問題が物に即して論じられることで、その造形芸術への多彩な関わり方が明らかにになってきたと言える。

発表者の関心は、基準作に乏しく、鑑識に難点が多いにもかかわらず、光悦の作品が高い評価と関心を集めている状況がどのように導かれたか、という素朴な疑問に端を発している。高い評価は、外国からの称賛と、茶道という日本のイメージによって、先に出来上がっていた。鑑識の難点については、昭和に入ってから問題となってきたのである。

## 「茶の湯にみる「常」についての一考察」

布笠千加子

川上不自（享保四年〜文化四年（一七一九〜一八〇七））は、表千家七代如心斎の高弟として江戸に千家流の茶を広めた茶人として知られている。時代に対応する新しい茶、いわゆる七事式の制定に参画、また、利休居士真筆の辞世の軸を江戸・冬木屋から千家に帰

還させるなど、その功績は後の千家茶道の発展に大きな影響を与えている。その不白の書き残した書に、「常」と大きく書かれた軸『茶道訓』が数多く残されている。

また、不白の著した茶書である『不白筆記』や『茶話抄』にも「茶の湯は常」と説くところが見られることから、「常」という視座が不白の思想においていかに重要な位置を占めているかを察することが出来るであろう。では、なぜこの時代に「常」を意識したのか、それに起因するものはなんであったのか。本発表では、今まで十分に論じられてこなかった「常」の思想がどのように理解されていたかを、茶道史の流れを踏まえつつ考察を行なった。

先ず、『茶話抄』では、「茶の心持として別になし、常を茶になして、茶の臨んで改らぬ様ニ、又言葉などにあやを付て虚のなき様に有りたし」とあり、また『不白筆記』には、如心齋が不白に伝えた教えとして、「茶之湯でない処か茶之湯也下常々被仰候」と説かれている。つまり、茶の湯の精神は、日常生活すべてに拡散しているのであり、茶室での一定時間のみを限定しての茶人の在り方は十全の価値をもたなかったということが解る。

た益田鈍翁が没すると、昭乗への関心は急速に低下してしまう。これは近代数寄者の時代の終焉と、流派茶道の強大化の影響と見るこゝとが出来る。

昭乗はまた画家としても高く評価されており、美術史においても「書画一致の体現者」「最後の画僧」と位置づけられていた。しかし戦後には、関心の低下から不遇な扱いを受けてきた。また孤篷庵に所蔵される著名な《小堀遠州像》は、しばしば筆者不明として扱われてきた。しかし近年になって、近世絵画史の中部義隆氏が、昭乗筆と指摘している。昭乗絵画はその最も著名な作品が、これまで作者不明として扱われてきたことになる。このように昭乗は、茶道史においては盲点として閑却され、美術史においては不遇に評価を下げられてしまった人物である。こうした昭乗の事例は、戦前から戦後にかけての茶道史、そして日本美術史における変化の一例相として見るべきだろう。

### 「近代茶道の歴史社会学」―出発点としての『近代茶道史の研究』―

田中秀隆  
拙著『近代茶道の歴史社会学』は、熊倉功

しかし、不白の「常」とは単なる生活の日常性を主張したのではなかった。「稽古ハ其心持千疊敷に金張付ヲ目當ニいたし傲う習ふへし、かくて修練事を重れば、おのれと青に立帰り、茶の極意ニ至る者なりとぞ、」というように、彼の言う「常」とは、たまたま偶然に訪れるのではなく、たゆまない稽古・修行の結果として自然に恒常的なものとなった状態を指すのであった。更に、このことを裏付けるものとして、不白が表千家八代啐啄齋に贈ったと伝えられている、「十牛の図」の修行過程の第九番目、返本還源の箇所「初め尋牛の所にて茶事をする。是茶の湯は常の事なり」とある。また「常」の軸に「夫茶道有心不在術 有術不有心 心術双忘 一味常頭 是茶ノ湯ノ妙道也」とあるように、すなわち、修行を極めた結果、ついには心も業も忘れ、それらが渾然一体となった姿に茶の湯の妙が現れる、この姿が「常」であると理解する。更に不白は、その境地を、金剛経にある「應无所住而生其心」という言葉で表している。ここに、不白の「常」の思想の独自性があると考えられる。これらの思想を前提に「守破離」の修行論が形成されたと思われる。では、なぜ稽古・修行の重要性を強調した

「常」を意識したのだろうか。如心齋・不白の生きた時代は、茶道人口の増加により、門弟の教授法、相伝段階の設定などが精緻に整備され、それに伴い型の形式化を促した。それ故、茶の湯が「習い事」に留まり、茶の形骸化をもたらす結果となった。したがって、この「常」の思想は、型の修行性を重視しつつも、非日常の「習い事」からの脱却を図ろうとしたものであり、如心齋・不白の時代の茶道界を反映した茶道論であったのではないかと考えられる。

(平成二十年六月二十八日)  
「松花堂昭乗の絵画と近代美術―特に小堀遠州像との関係について―」

依田 徹

近代の茶道具収集と美術史という視点から見ると、松花堂昭乗は重要な人物となる。

昭乗が所持した茶道具（「八幡名物」）には、『国司茄子』（藤田美術館）や『花白河蒔絵硯箱』（根津美術館）があり、共に藤田伝三郎と根津嘉一郎による道具収集の逸話として語られている。また大正十一年には、光悦会と同様に松花堂会という定例茶会も始まっている。しかし「八幡名物の問屋」と評され

茶の湯（『茶道聚錦』所収）での知識人を媒介者とした単純なモデルを出発点に、芸術、アイデンティティ、ナショナルリズムを扱える形に膨らませていったことを中心に説明した。

(平成二十年九月二十七日)

「江戸遺跡から出土する茶の湯道具 ―大名屋敷の発掘調査事例を中心に―」

追川吉生

東京大学本郷構内は、江戸時代の加賀藩などの大名屋敷や旗本屋敷、寺院や町屋の一部にまたがるように存在し、一九八四年以降発掘調査が行われている。

加賀藩邸の御殿空間にあたる御殿下記念館地点で検出された五三七号遺構、三九五号遺構は、どちらも一七〇三年（元禄一六）のいわゆる「水戸様火事」による焼土層にバックされた地下室で、規模も同程度の遺構である。しかし出土遺物を比較すると、前者が肥前製磁器皿を中心とした陶磁器を主体とする（陶磁器を用いる宴会）のに対して、後者はカワラケ（土器皿）を主体とする（カワラケを用いる宴会）。

この【陶磁器を用いる宴会】と【カワラケを用いる宴会】の違いを考える上で注目される

近畿例会

(平成二十年七月十二日)

「茶の湯のコミュニケーション」

——『天王寺屋宗達茶会記』の数理的分析——

山田哲也

天王寺屋津田宗達の他会記を数理的に分析することにより、従来の「茶会記」研究では試みられることのなかった茶人のネットワーキング形成を抽出し、まずそこにおける歴史的問題を提示する。ところで茶会記の数理的問題点を提示するにあたり、原本影印本から活字本の誤りを訂正する作業から入った。これにより活字本では見逃すか、曖昧にしてきた人物を特定できた。こうして厳密化されたデータをエクセルに入力し、さらに加工をし、そのデータをDPCIU・UCINET・Cyto scapeなどのソフトを使用して、分析を試みた。その結果二十一個の完全多角形のクラスタを得た。このうち最大のものは千宗易(利休)が所属する完全七角形である。このクラスタの意味するものは、千宗易と宗達を始めとする天王寺屋一族との密接な繋がりである。回数こそ少ないが、そこには堺の天王寺屋財閥に食い込み、堺の茶の湯の世界での自らの位置というものを考えた宗易の姿が

る遺構が、医学部附属病院中央診療棟地点で検出された池状遺構である。遺物組成からみると、池状遺構はカワラケが五六〇点以上出土することから【カワラケを用いる宴会】に分類される。そして注目すべきは、「寛永六年三月」などの文字が墨書された木簡を同伴する点である。寛永六年(一六二九)四月、加賀藩邸では秀忠・家光の御成が行われた。將軍の出向である御成の主目的は主従関係の確認であり、それを儀礼化した式三献や献上が重要視された。寛永六年の御成の宴会で供された膳に関しては詳らかではないが、御成ではカワラケが用いられたことが知られている。陶磁器のように使用による汚れを落とすことができないカワラケは、使った後に廃棄される。池状遺構から出土したカワラケも、こうして廃棄されたものである。ここに【陶磁器を用いる宴会】と【カワラケを用いる宴会】の差異を求めることができる。

十六世紀末十七世紀初頭に成立した武家茶の湯は、御成と不可分の関係にある。寛永六年の御成も、記録によれば数寄屋での茶事から始まっている。遺跡にみられる【カワラケを用いる宴会】は、そうした武家茶の湯の一端を反映しているものと考えられる。

多数の投稿をお待ちしております。

なお、詳細につきましては学会事務局にお問い合わせ下さい。

例会のご案内

東京例会(会場 五島美術館講堂 午後二時)

- 日時 四月二十五日(土)
演題 「『名物茶入の物語』紹介」 矢野環氏・関口敦仁氏
日時 五月三十日(土)
演題 「武野紹鷗の手紙」 宇野千代子氏
日時 五月三十日(土)
演題 「向付展によせて」 砂澤祐子氏
演題 「染織文化から見た紹鷗」 佐藤留美氏
日時 六月二十七日(土)
演題 「紹鷗緞子について」 吉岡明美氏
演題 「未定」 木塚久仁子氏
日時 九月十九日(土)
演題 「根津美術館オープンング紹介」 多比羅菜美子氏
演題 「佐倉藩堀田家の茶道」 小倉光夫氏
日時 十一月二十八日(土)
演題 「大東急記念文庫の名品から——創立六十周年展にちなんで——」 村木敬子氏

演題 「未定」

谷村玲子氏

日時 一月三十日(土)

演題 「『小堀遠州の茶道』によせて」

深谷信子氏

演題 「未定」

福島洋子氏

静岡例会

日時 五月二十四日(日)

会場 静岡文化芸術大学・浜松市 午後一時半

演題 「茶文化と茶の湯」 谷 晃氏

日時 八月二十二日(土)

会場 お茶の郷博物館・島田市 午後一時半

演題 「遠州の茶室と庭」 中村利則氏

(終了後茶室の案内と説明)

日時 十月二十四日(土)

会場 掛川市・美観ホール 午後一時~四時半

演題 「第二十四回国民文化祭掛川市実行委員会と共催 主題「日本の茶文化」」

基調講演 「茶の文化と文明(仮題)」

川勝平太氏

フォーラム「日本人にとって茶の湯とは何か」

「禅茶録に見る茶の湯」 吉野白雲氏

「外国から見た茶の湯」

H. S. ヘンネマン氏

「日本人と茶の湯」 倉澤行洋氏

浮上するのである。さらに他会記十九年分四百四十五会を時系列分析を試みた。クラスタごとの分析では分かりにくい。そこで千宗易と完全七角形をなした七人に関係の深い二人を加えた九人について、年を経る毎に相互に何度顔を合わせたかをPagekを使用しグラフ表示した。また宗易が時系列に何人と知り合ってしまったかを円の大きさで、横軸に総顔合わせ回数をを用いてMotion Chartによって動画像を試みた。

平成二十一年度大会のお知らせ

六月十三日(土)に京大会館で、研究発表・総会・シンポジウム・懇親会が行われます。六月十四日(日)は見学会の予定をしております。見学会の内容が決まり次第お知らせします。

投稿論文の募集

学会事務局では投稿論文を募集しています。次号の第十七号(平成二十一年度版)に掲載予定です。投稿論文の締切は八月末となっております。

司会 小泊重洋氏

東海例会(会場 名古屋文化短期大学アセンブリ・ホール 午後六時)

日時 四月二十四日(金)

演題 「金森宗和と尾張徳川家」 岡佳子氏

演題 「慶栄寺の組立茶室を中心に——忘れ

水探訪余話——」 長谷義隆氏

日時 六月二十六日(金)

演題 「桃山の武将茶人——古田織部と上田宗箇——」 上田宗岡氏

演題 「將軍秀忠の教奇の御成」 佐藤豊三氏

日時 九月二十五日(金)

演題 「鎌倉時代の茶道」 福島金治氏

演題 「建蓋と天目」 森達也氏

日時 十一月二十七日(金)

演題 「天目の由来——中峰明本関係説と幻住庵清規——」 岩田澄子氏

演題 「東山御物について」 志賀太郎氏

第二回(茶文化を楽しむ)

日時 七月四日(土)

会場 ノリタケの森 午後二時

内容 「アフタヌーンティ」

クラフトセンター・ミュージアム見学

ガイド落合氏

レストラン・キルンにてアフタヌーン  
ティ

近畿例会

日時 七月十八日(土) (会場 茶道資料館ホール 午後二時〜 呈茶付き)  
(会費は会員・一般ともに三百五十円)  
演題 「茶の湯の中の文房具」 橘倫子氏  
演題 「煎茶と文房具」(仮題) 大槻幹郎氏

高知例会(会場 高知県立文学館慶雲庵茶室 午前十時〜)

日時 六月二十八日(日)  
演題 「茶の湯文化学会平成二十一年度大会の研究発表をテーマとしたシンポジウム」 永吉溪滋氏・柏井武氏  
茶事(正午〜午後四時)  
日時 九月六日(日)  
演題 「茶の湯と陰陽五行」 永吉溪滋氏  
日時 十二月十三日(日)  
内容 「茶の湯関係文献を読み書評・所見発表」

茶事(正午〜午後四時)  
日時 二月七日(日)  
内容 「未定」

このほか、一般の方々が茶の湯に親しんでもらうための茶席を、毎週日曜日を主体(十時〜十六時)に同所で設けます。

後記

例会の掲載につきましては、編集上の都合により、各例会の開催時期の順序が掲載時に前後することもございます。ご理解のほど宜しくお願い致します。

